



TITLE:

「宇宙の旅」を読む：新刊紹介

AUTHOR(S):

古川, 龍城

---

CITATION:

古川, 龍城. 「宇宙の旅」を読む：新刊紹介. 天界 1922, 2(15): 44-44

ISSUE DATE:

1922-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159658>

RIGHT:

## 「宇宙の旅」を読む

古川 龍 城

原書は英國牛津大學教授ターナー博士の著はす所で、其れを平山清次博士指導校閲の下に大沼十太郎氏が譯されたものである。一月五日東京で出版されたのを一月十四日京都で讀むを得たのは聊か早い方かと思ふ。原著者は去る明治二十九年皆既日蝕觀測の爲め日本へ渡來したさうで、本書の中にも本邦に於ける原著者の日蝕觀測の有様を日本畫家が畫いたものを挿入して居る。ターナー博士は現代に隠れない大家である上、本邦にも來訪されたこと云ふ事が、本書に對する尊敬の念の外、深い親しみを感ぜしめる。

元來本書は六回に渡る通俗講演を蒐めた物で、極めて解り易く述べてあるから未だ天文書の一頁も讀まない讀者でも決して其の難解を嘲つ事は無いであらう。目次は次の如く排列してある。

第一講 地球を出發點として

第二講 行程幾億里——空氣の層を抜け出で、

第三講 望遠鏡によつて

第四講 月と惑星の見物

第五講 太陽

第六講 恒星

全篇を通讀するに尋常一様の天文書の順序を追はず、著者が思ひの儘、興味本位に材料を排列し、惑星の事を説明中急に隣世界の月の事を思ひ出し、其の説明に一轉するあたり常套を脱して居て、讀者の心を飽かしめない所、甚だ感服の至りである。誰でもが一般の科學書を繙く様に、一頁讀んで欠伸をし、二頁讀んで鼻の孔をはちくり、三頁目には到頭机から起ち上つて、戸外に出て終ふ様な手数をせずとも、知らず／＼前の頁へ進んで行くあたり、原著者

の巧妙な外、譯者の譯し振りが又平易流暢で、三文文士の駄小説を讀むよりも、其の文章だけでも面白味は確かにある。挿圖にも中々奇抜な目先の變つた物が澤山ある。ハリが歿後其の豫言したハリ彗星が出現したから天國から天使が下つて墓下のハリを呼び覺まし、此の彗星を見せて居る所など見て居る一種妙な悲しい様な心地になつた。其れから恒星の見掛は大小を以つては其の距離は判るものでなく、小さくても近きもの、大きくても遠きものあること、クリスマス、ツリーに吊された紙人形を一方から見れば、大小、遠近無秩序であると同様なりと其の圖を示し、一群の恒星が平行運動をするのを後方から見れば丁度其の前進方向が一點に收斂する如く見えるとして一團の雁が打ち連れて平行に飛ぶ様を透視するご矢張り前方に收斂する如く見えるとなし、其の圖を示すなど比喩が誠に氣が利いて、能く其の原理を了解せしめる。其れに譯者及び校閱者が色々の心遣ひを以つて足らざるを補ひ、古きを新にするなど中々行き届いた物である。

會員諸子の中には屢本誌の通俗な記事ですらも、専門に傾き、解りにく／＼困るこの苦情を訴へる人があつて編輯者に首を捻らせろが、本書を讀みた人々は決してさる危惧を用ひる事の無駄であつて、如何に解りよく、如何に興味深く書かれ且つ譯されて居るかを感歎せずには居られないであらう。終りに此の本は東京市日本橋區住吉町十三番地ライト社發行、定價金貳圓八拾錢である事を附け加へて置く。

## ●大阪天文臺の計畫

本會大阪支部會員諸氏は先頃より、大阪城舊天主臺跡に天文臺を設立し、大に學術の研究と普及とに資せんを協議を進めておられる由。

## ●古賀和吉氏歸郷

昨年大阪に同好會支部開設以來、熱心に働かれた同氏は、今月限り大阪を去り、故郷九州大牟田に歸省、今後は同地に於いて九州支部設立のため活動せられる筈。